

環境に働きかける

ずいぶん遅くなりましたが、令和元年度第1号の「特別支援教育つうしん」を発刊いたします。今年度も片岡が担当いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

かなり前になるのですが、ある企業の作業場面を見学する機会をいただきました。私たちが案内された大きな倉庫の中では、荷物の仕分けや整理、運搬等の作業が行われており、そこに、障害のある一人の青年が働いていました。黙々と作業に取り組んでいる彼の姿に感心しつつ、所長さんに彼のことを尋ねてみたのです。すると、彼は、毎日、交通機関を乗り継いで通勤していること、日々誠実に仕事を頑張っているけれど、時には、ストレスがたまって、所長さんのところに相談に来ることなどを話してくださいました。

それらのエピソードの中で、私が驚いたことがありました。それは、彼が、自ら職場の環境に働きかけて、作業しやすいように改善を進めていたことでした。例えば、配送物を送り先ごとに仕分けて札を付ける作業が、以前は、札がばらばらに置かれていたために仕分けづらかったようです。それを、彼が行き先によって色の違う札を予め束ねておくという工夫を加えたことで、格段に効率化が進んだというのです。その工夫は、彼以外の作業員の方々にも仕事がしやすい状況を生み出しており、みんなが彼に感謝しているということでした。

そのお話を伺いながら、在学中に彼はどのような学習経験を積んできたんだろう…と考えました。多分、作業的な学習において、効率化された環境で作業していたのではないかと想像されます。そして、そのことは、彼にとって、作業を進める上での効率と、やり遂げた達成感を感じる経験となっていたのだと思われます。ただ、その経験をその学習だけにとどめず、今の職場でそれを具現化させたことに私は感動を覚えます。学校で、働きやすい環境の中で作業するという経験は、そのときの働きやすさだけではなく、将来、子どもたちが身を置く職場環境に自ら働きかける礎を育てているのだということに気付かされた瞬間でもありました。しかし、それを彼のように今後の生活にも生きて働くものにするためには、授業の中で、もうひと工夫働きかけが必要なの気がします。例えば、普段の学習の中で行っている作業内容のことだけではなく、「このように道具を並べてあるから動きが自然に流れていくので作業がしやすいな」と作業環境について振り返ったり、定期的に作業環境について考え、自分たちで改善できるような時間を意図的に設定してみたりするなどの取組も考えられそうです。

先日、行われた「キャリア教育フェア」でも、子どもたちが生き生きと活躍していた姿が多く見られたと聞いています（私は残念ながら参加できませんでしたが…）。本物の場で、自ら考えて、判断し、実際に活動して成功体験を積むといったサイクルをたくさん経験することが生きて働く力の育成につながっていくことになるのでしょうね。

「非認知能力」

平成29年3月に国立教育政策研究所から示された「非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書」の中に興味深い情報が掲載されています。

それは、これまで学業成績や各種の学力に関するテストの成績、アカデミックな能力の高さ等、より高い認知能力を備えることが個人の成功、ひいては、社会の経済的発展に有効であると考えられてきましたが、近年、こうした認知能力の高さだけが人生の成功の鍵ではないことを示唆する研究結果が相次いで報告されているようです。また、それを受けて、我々人間が持つ、認知能力ではない側面の特徴、いわゆる「非認知能力」への関心が高まっているというのです。

では、非認知能力とは、こういったものなのでしょう。

“非”認知（認知に非ず）ということになるので、認知能力以外の能力は全てということになるのかもしれませんが。文献によっても、様々な表現があるように思われますが、岡山大学の中山芳一准教授は、次のような分類をされています。

3つ（自分×2＋他者）の非認知能力

自分

- 自己啓発系…自分を高める力
 - ・意欲・向上心
 - ・自尊感情
 - ・楽観性 … など

- 自己調整系…自分と向き合う力
 - ・自制心
 - ・忍耐力
 - ・レジリエンス … など

他者

- 他者協働系…他者とつながる力
 - ・コミュニケーション力
 - ・共感性
 - ・協調性 … など

また、これらの非認知能力が高まることで、絡み合うように認知能力も高まっていくといわれています。そして、この非認知能力が高まる学習スタイルとしては、座学による間接型よりも体験による直接型が有効であるようです。例えば、自制心、忍耐力等の必要性や有効性は、子供自身が何らかのトラブルやストレスを経験した場合に強く感じられるものであり、まさに、そのタイミングこそがその対処法を身に付ける絶好の機会であるということです。

ということは、幼児教育が遊びという体験的な場面で様々な学びを提供していること、また、知的障害教育が生活に密着した独自の教科を設定していることや、各教科等を合わせた指導の中で、生活や遊び、日常生活、作業といった生活の文脈に沿って学習を展開していることにとっても深い意味があるということであり、その重要性を改めて痛感しているところです。

学びに向かう力、人間性等

ところで、「特別支援学校学習指導要領・学指導要領解説総則編（幼稚部・小学部・中学部）平成30年3月」には、「学びに向かう力、人間性等」について、次のように書かれています。

児童生徒一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくためには、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要となる。これらは、自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる『メタ認知』に関わる能力を含むものである。こうした力は、社会や生活の中で児童生徒が様々な困難に直面する可能性を低くしたり、直面した困難への対処方法を見いだしたりできるようにすることにつながる重要な力である。

このことは、先述した非認知能力の内容と重なるところが非常に多くあると思われます。つまり、文部科学省も育成を目指す資質・能力の一つとして非認知能力に着目し、新学習指導要領の中に位置付けていることとなります。中山准教授は、「知識及び技能」が認知能力、「学びに向かう力、人間性等」が非認知能力、「思考力、判断力、表現力等」は認知能力、非認知能力、どちらも絡んでいるとおっしゃっていました。非認知的能力。今後も注目すべきキーワードだと思います。

研修講座へお越しく下さい！

夏季休業中、当センターでは様々な研修講座を開講しています。当センターWebページの研修講座案内に研修講座名や期日等、必要な情報を掲載しておりますので、ぜひご覧いただき、積極的に受講して下さったと思います。Webページには、特別支援教育部が実施する研修講座について、チラシで紹介しているページがありますので、URLを示しておきます。ニーズに合う研修講座を選んで、申し込んで下さったと思います。ぜひ、一緒に学びましょう！

<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/gakkoushien/tokubetusien/index.html>